「ブームになりつつあるかもしれない対話について」
6月23日（水）14：00～ 中央図書館2階セミナー室A
勉強会レジュメ：哲学コース 3年 想田 瑞恵

【参考資料】

- A. 6月17日朝日新聞朝刊
 - B. 筑波大学平成22年度就職の手引き
- ※6/16 勉強会まとめ

【前回の確認】

「対話は、気持ちを傷つける・傷つけられるものであり、実践にあたってどうしても抵抗がある」（無神経でないか気になるなど）

→ 「なぜ対話を実践したいと思うのか」

→ 「承認（自己肯定・自尊心）と「個性」を獲得するにはこれしかないから」

→ 「承認を欲する気持ちがまずあるから、対話が困難になるのではないか」

＝対話とは、話題に関する我々の理解を深めるためのものである

【問題点の検討】

対話によって「個性を見出そう・それを承認してもらおう」とする気持ちをかかえ、その維持のために「優しい人間関係」を築こうとする。つまり、察するコミュニケーション※の延長として対話を捉える点に問題があった。対話が変質してしまっているのだ（個人主義が変質したように）。

承認を欲するから、無神経であることを恐れ、「対等」を要求する。このように、変質した対話では、「違うことを感じるのが個性だ」と奇を衒う発言をしたり、感受性の違いを確認するだけで議論が終わる、つまり言いつばなしになってしまうこともあるだろう。感受性の違い（ダイヤの原石・個性の基盤）をあるがままに承認してくれること（＝「対等」）を互いに求め、違いをそのまま保つ方向に進むからだ。ゆえに、自分の前提にメスを入れ、合意を目指していくのが本来の対話であるはずが、違いをそのままにしておかず、共通の納得できるものを見出していこうとすると、激しく動揺してしまう。

いくら承認がほしくても、察するコミュニケーションの代わりや延長として対話を試みたところで、それは得られない。対話において、他者とは理解のための同盟者なのだが、変質した対話においては、他者とは、自分が承認を得るための道具となってしまっているからだ。

※察するコミュニケーション：共同体崩壊後、枠ではなくその場の空気によるその都度の具体的な承認を求め合うもの。傷つけられない「優しい関係」を築くことが目的